

里親になる「子どもの成長とともに」～橋本文徳さん～

2019年度より里親になられた橋本文徳さん（写真左）にお話を聞きました。橋本さんは元教員で現職のときから、里親制度について興味をもたれており、定年退職後、里親になりました。

了戒：こんにちは。里親になられたきっかけは何ですか。

橋本：現職のときから、里親制度のことは知っていましたが、なかなか時間がありませんでした。ただ、当時から社会的養護を必要とすることを持ち「何とかしたい、助けたい」と思っていました。退職後、研修会を受け、受け入れることにしました。いざ受け入れることが決まったとき、突然不安が襲ってきました。「自分ができるのだろうか。思春期のこどもを預かることができるのだろうか」あれだけ決意して、準備してきたのですが、出会うまで不安で押しつぶされそうになりました。そして、初対面の日、その子は緊張した私たちとは対照的にニコツとした笑顔で駆け寄ってきてくれました。「君の笑顔は素敵だね！」と声をかけたほど、その時の顔が今でも忘れられません。体験期間が終わり、いざ受け入れを正式に決定するかを家庭で話しました。家族が協力しなければ、受け入れることが難しいと考えていました。私は、正直不安の方が勝っておりまして。しかし、家族から「ここがだめなら、あの子は同じ過程を繰り返すだろう」こどもからは「あなたたちはプロやろ」と言われ、家族の思いが一つとなり、受け入れることが決まりました。

了戒：受け入れてからの生活はどうでしたか。

橋本：受け入れ直後は悩みが尽きず、私自身体調を崩すことがありました。そこには「この子とどう関わっていけばよいのだろうか。」という壁があったような気がします。困難な環境で過ごしてきたこの子にどうにか寄り添えないか、そんな私の思い上がりが、言葉かけや接する態度に出ていると思います。そんなある日、預かった子の友だちが遊びに来た際、友だちから「どうして表札の名前と君の名字は違うの？」と尋ねられたそうです。そこで、これは私たちのだけの課題ではないと思い、



学校の保護者会で事情を話すことにしました。そうすると、学校や地域の方がたくさん声をかけてくれるようになりました。また、本人にも私から「いつでも、君の一番の味方だからね」と伝えました。現在、中学3年生です。思春期の中、大きな喧嘩ももちろんありました。それでも、この子の里親になれてよかったと思っています。

了戒：里親になってどうですか。

橋本：私はこれまで、仕事が忙しいという理由で子どもを見ているようで、見ていませんでした。いや、見るのが怖かったのかもしれませんが。しかし、里親としてこの子を預かってから現在、変わったと思っています。何より育てなきゃいけないと思っていたことから、こちらもともに育てられたことに気づいたからです。そして、自身や家庭のあり方が見えてきました。子どもはどこかに不安をもっています。子どもと関わる時、その子の思いや背景を大切にしたいと思っています。今は、子どもたちから元気をもらいます。子どもの成長（見方・考え方・将来）に寄り添える楽しみが里親活動にはあります。

【問い合わせ先】

大分県中央児童相談所 里親担当

TEL：097-544-2016

mail：a12403@pref.oita.lg.jp

【NPO法人 chields（チーズ）】

TEL：097-585-5400

mail：info@chields.or.jp